

## 戦後初期における入門期国語教科書の改革

吉 田 裕 久

A Study of Primer Textbooks Revision  
in Japanese Language in the Early Postwar Years

Hirohisa YOSHIDA

### 要 旨

『まことさんはなごさん』・『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』（1949年、写真1）は、戦後初期における入門期国語教科書として編纂された。

GHQ/CIE係官として着任したヤイディ（Jeidy）及びストリックランド（Strickland）は、その中身（内容・表現）について厳しく検閲した。内容としては連続性のある読み物（ストーリーメソッド）に、また表現については語彙の提出を少数にすることを求めた。文部省は、これらの指示に基づいて、入門期国語教科書を大改訂した。こうしてできあがった3冊の入門期国語教科書の編纂方法は、これに続く検定国語教科書の編纂方法に大きな影響を与えた。

これら入門期国語教科書の編纂は、母語学習の国語教科書編纂に外国の検閲（指導）を受けたという点で、国語教科書史上まさに画期的なできごとであった。

キーワード：戦後国語教科書史、入門期国語教科書、まことさんはなごさん、いなかのいちにち、いさむさんのうち



写真1 入門期国語教科書3冊の表紙

## 1. はじめに—研究の背景と目的—

戦後初期（被占領期）、GHQ/CIE（総司令部民間情報教育局）は、戦後日本の教育改革はもちろん、新教育の学校で使用される教科書改革（あり方）についても積極的に関与した。それは、小学校一年生用の入門期国語教科書についても同様であった。わが国のそれまでの伝統的な編纂方法である「言語本位」（文字→語→文へ発展）の編纂方法に対して再考を促し、新たに学習者の発達に即した「学習者本位」（興味・関心）の編纂方法を提示し、その実現に向けて在任中の限られた時間の中で、精力的に尽力した。

本稿は、この戦後初期における入門期国語教科書のあり方をめぐる GHQ/CIE と文部省とのやり取りの実態について、これまで検討されることがほとんどなかった米国立公文書館（National Archives and Records Administration=NARA）所蔵の資料を用いて明らかにしようとするものである。

先行研究<sup>1)</sup>では、文部省側の当事者（国語の主担当は石森延男）による後年の回想によって、この入門期国語教科書の編纂もGHQ/CIE による文部省への押しつけだと解釈されてきたところがある。が、当時の実際の記録（米国立公文書館所蔵の Conference Report、Weekly Report 等）によれば、学習者の実態（興味・関心、発達など）を重視した編纂方法に文部省側も次第にその意義を認め、それに基づいて教科書作成を展開していったのではないかというのが現時点における筆者の見通し（仮説）である。

この時の会議録は、当時はもちろん部外秘（Rejected）扱いであった。が、GHQ/CIE がこれらの文書を占領終了後に米国に持ち帰り、米国立公文書館に所蔵したことによって、今日、当時のままで精査することができるようになっている。今、これらの資料の分析を通して、その実態について明らかにしていきたい。

## 2. 研究の方法

(1) 1947（昭和22）年、本研究で取り上げる『まことさんはなこさん』等の入門期国語教科書に先だって、新教育にふさわしい小学校国語教科書として、文部省編纂の国定教科書『こくご』が編纂・発行された。「おはなをかざる みんないいこ」という表現で始まるこの国語教科書は、斬新な国語教科書（民主・平等）として高く評価され、歓迎された。が、GHQ/CIEの係官からは児童の言語能力の発達に合っていないなどと厳しく指摘され、改訂を余儀なくされた。この結果できあがったのが、昭和24年に編纂・発行された『まことさんはなこさん』である。この『まことさんはなこさん』（プレプリマ、第一入門教科書）の編纂をめぐる具体的なやりとりについて、GHQ/SCAPのCIE文書（Conference ReportおよびWeekly Report）を米国立公文書館の現地調査によってその実態を明らかにする。

(2) 『まことさんはなこさん』（プレプリマ・第一入門教科書）に続いて、プリマ・第二入門教科書として『いなかのいちにち』、さらにファーストリーダー・第一読本として『いさむさんのうち』が編纂・発行された。この編纂に関する具体的なやりとりについても、GHQ/SCAPのCIE文書（Conference ReportやWeekly Report）を米国立公文書館で調査し、その実態を明らかにする。この時、日本・文部省側の資料として、GHQ/CIEと応対した文部省の石森延男等の関連発言も比較・参照する。

(3) GHQ/CIEによって参考として示されたアメリカの入門期国語教科書について、筑波大学附属図書館のヘファナン文庫で調査し、その関連を明らかにする。

(4) これらの調査を基に、戦後初期における入門期国語教科書の成立の経緯、とりわけアメリカ側の示唆、そして、その結果編纂された『まことさんはなこさん』『いなかのいちにち』『いさむさんのうち』について、その特色、役割・意義等を実証的に明らかにする。さらに、これら文部省で編纂された入門期国語教科書と、その後に編纂・発行された検定の入門期国語教科書とを比較・検討することによって、その影響関係について考察する。

以上の調査・分析・考察によって得られた成果を戦後初期における入門期国語教科書（『まことさんはなこさん』『いなかのいちにち』『いさむさんのうち』）の内容、特色、影響等に関する研究として総括する。

### 3. 考 察

#### 1. 『まことさんはなこさん』

(1) 『こくご』（1947年）から『まことさんはなこさん』（1949年）へ

1947（昭和22）年、新教育にふさわしい小学校国語教科書として文部省編纂の『国語』（各学年2冊、全12冊）が発行された。その第1学年上巻として編纂された『こくご』は、「おはなをかざる みんないいこ きれいなことば みんないいこ なかよしこよし みんないいこ」（写真2）というリズムカルな表現、内容的にも民主的・平和的で、新教育にふさわしい斬新な国語教科書として高く評価された。しかし、相次いで着任したGHQ/CIEの係官（ヘファナン、ヤイディ、ストリックランド）からは、「児童の発達段階が考慮されていない」、「児童の言語能力の実態に合っていない」などと厳しく指摘され、この改訂を余儀なくされた。それに応じてできあがったのが、『まことさんはなこさん』・『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』3冊の入門期国語教科書である。

(2) 『まことさんはなこさん』の生成

このうち、第一入門教科書（プレプリマ）『まことさんはなこさん』（写真3）に関する具体的なやりとりについて、GHQ/CIE文書（Weekly Report およびConference Reportを米国立公文



写真2 こくご（みんないいこ）



写真3 まことさんはなこさん

書館で調査した。またこの時の日本側当事者であった文部省の石森延男・篠原利逸<sup>2)</sup>・猪股辰弥<sup>3)</sup>等の関連発言・論文・著書等を国立国会図書館をはじめ関係諸機関で調査した。

これらの資料によると、この『まことさんはなこさん』に対するCIEの検閲はこのほか厳しく行われたようである。まさに後年、石森延男が回想で、次のように述べているとおりである。

指導者として招かれて来朝したストリ克蘭ド<sup>(ママ)</sup>さんに、どうもむりなところがあるといわれてしまった。とくに小学校一年用のものについて、こんこんと注意された。いわれたけれども、わたしにはどうも合点がいかない。ストリ克蘭ドさんは、文字教育の場合、語形で教えないといけないという。したがって、いきなり新語が、各ページに六語も七語も出るような教科書は、学習上むりだという。それはわかるが、日本の子どもにはむりでないとわたしは言いはる。(中略) ストリ克蘭ドさんはそんなはずはない、そんな不合理な学習はないとこれも言いはる。<sup>4)</sup>

写真4は、その時のストリ克蘭ドによる会議報告の一部である。まさに侃々諤々、喧々囂々の議論が「辞職」をかけて展開したようである。

この『まことさんはなこさん』の扱い方を説明した解説書Teaching manualにも、入門期国語教科書・教育のあり方について、ヤイディによる詳細な検閲(指示・示唆・助言)の跡(写真5)が残っている。

なお、『まことさんはなこさん』ができあがるプロセスでは、「まことさんはるこさん」という名称(女の子の名前は「はるこさん」)も存在していたようである。このことは、この会議録の調査によって初めて明らかになったことである。なお、「はるこさん」が「はなこさん」になった経緯は分からない。

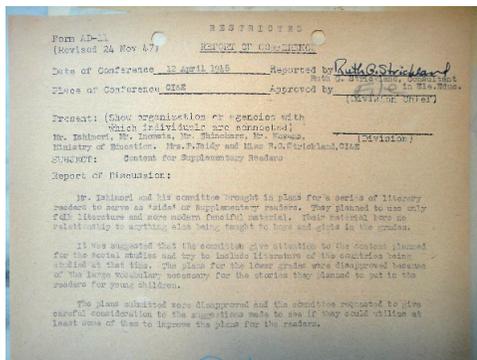


写真4 R.G.Stricklandの会議報告

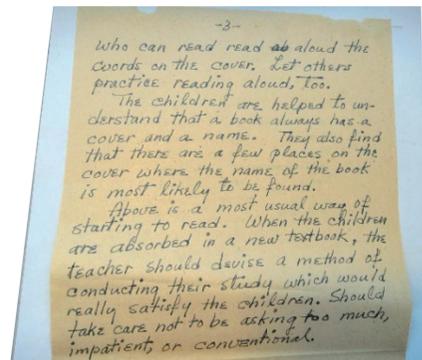


写真5 Pauline Jeidyによる修正の跡

### (3) 『秘』昭和二十四年度 こくご一(修正原案)

これらの会議報告の中に、『こくご一』から『まことさんはなこさん』へすんなりと移行したのではなく、これらの間に『こくご一』の改訂版(『秘』昭和二十四年度 こくご一(修正原案))が存在していたことがわかる資料を見いだした。<sup>5)</sup>そこに掲げられている目次は、次のとおりである。その実際を、写真(写真6)でも掲げておく。右肩に、『秘』(赤)が押印されている。

- はなごさん  
たろうさん
1. みんないいこ
  2. あさ
  3. ゆうがた
  4. よる
  5. たまいれ
  6. かくれんぼ
  7. がっこう
  8. わたくしのもちもの
  9. きょうしつにあるもの
  10. ゆうぎ
  11. あいさつ
  12. 山のつつじ
  13. 山びこ
  14. よみかき
  15. こくばん
  16. 人のかお
  17. 手と足
  18. ひとつのことばから
  19. いろがみ
  20. なってみたいもの
  21. だんだんくわしくなる
  22. お月さんのくに

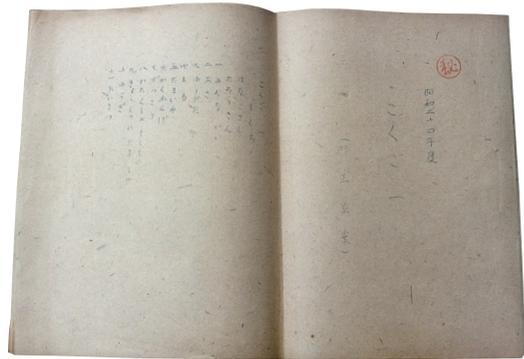


写真6 「秘昭和二十四年度 こくご一（修正原案）」目次

この目次を見てすぐに理解できるのは、新旧を合わせた、まさに折衷版になっていることである。冒頭部に「まことさんはなごさん」を思わせる教材（8ページを当てている）を新設し、その後は「みんないいこ」をそのまま再掲している。相手の要求に沿い、自分たちの思いも反映する、その上、改訂に多くの時間をかけなくてすむ、そうした上手い解決策を得たと考えたかもしれない。<sup>6)</sup>

ただこの足し算の一見名案も、結果的には無に帰することになる。と言うのも、アメリカ側の対応は、こんな微修正ですむレベルのことではなかったからである。前述したように、アメリカ側は、一年生の入門期にたくさんの語彙提出は無理だと指摘し、日本側は日本の子どもは大丈夫（仮名があるから）だと反発する、相互の主張が大きくすれ違い、言語摩擦・文化摩擦の状況が生じていた。そこで、アメリカの入門期教科書とも比較しながら語彙数を調査し、少数に絞ることが示唆されたようである。その結果としてできあがってくるのが、「こここ ととと ……」という無意味にも思える繰り返し表現であった。この点は、当用漢字、教育漢字、仮名づかい等、日本語の簡素化（Language Simplification）の動き<sup>7)</sup>とも関連していた。

なお、この目次から、冒頭が「はなごさん たろうさん」と、女の子→男の子の順であったことが伺える。この点は、案の段階ではあるが、驚きであり、斬新であったものと思われる。当時の男女同権の風潮を先取りしたものだっただけかもしれない。これが案に終わらず実現していたら、そ

の後の国語教科書の男女の扱いは変わっていたかもしれない。現に、検定教科書の時期におけるCIEの検定（検閲）は、このジェンダーの項目は重要な一項目であった。

## 2. 『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』

### (1) 『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』の緩やかな検閲

プレプリマ『まことさんはなこさん』に続くプリマ『いなかのいちにち』、第一読本『いさむさんのうち』について、GHQ/CIE文書の会議報告を調査した結果、これら2冊の教科書は前教科書に比べて、CIEの検閲が比較的緩やかに行われていることが分かった。三者間におけるこの対応の違いについて、まず指摘しておきたい。と言うのも、『いなかのいちにち』、『いさむさんのうち』については、Conference ReportおよびWeekly Reportなどに、その修正指示の痕跡がほとんど見られないからである。

その理由として、大きくは、次の2点を指摘することができよう。

#### ①CIE係官の入門期国語教科書の考え方を反映させて編集したこと

「子どもの心理的発達に沿っていること」、「新しい言葉（語句・語彙）を多くしないこと」、「言葉をリズムカルに繰り返して用いること」、「子どもの生活物語として展開すること」など、CIE係官ヤイディ、ストリックランドの入門期国語教科書の考え方・指示をあらかじめ踏まえて編集している。

#### ②アメリカの入門期国語教科書を参考にして進めたこと

“Today’s Work-play Books”, “Happy Road to Reading”, “Child Experience Reading”, “Progress in Reading”, “Child Activity Readers”, “The Highway to Reading”, “Easy Growth in Reading”など、アメリカの教科書を参考にしながら編集を進めたようである。石森延男の回想<sup>8)</sup>にも、同様の回想が記されている。まことさんとはなこさんという同年齢の子どもの生活を一連の物語として展開する手法は、これらに拠ったものと考えられる。

### (2) 『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』の指導書等

第1分冊の『まことさんはなこさん』については、教科書本文はもちろん、その解説（指導書）にまでCIE係官ヤイディ、ストリックランドによる厳しい添削・補正の跡がGHQ/SCAP文書に残されている。しかし第2分冊『いなかのいちにち』では、教科書本文・指導書の英訳はあるが、ヤイディ等の細かな指示の跡は見られない。さらに第3分冊『いさむさんのうち』に至っては、教科書本文の英訳まではあるが、指導書の英訳は見られない。

この検閲軟化の要因としては、①GHQの日本占領が終結に向かってきたこと、②入門期国語教科書の編修に石森延男他の文部省担当者が習熟・精通してきたこと、③アメリカの当時の入門期国語教科書がCIE係官ヘファナンによって輸入され、その具体的な参考のもとで編集が行われるようになったことなどが考えられる。

このアメリカの入門期国語教科書は、現在、筑波大学附属図書館（旧東京教育大学、元東京文理科大学）のヘファナン文庫に保存されている。これらのアメリカ入門期国語教科書を見ると、これら入門期国語教科書3冊の編修に大きな影響を及ぼしたことが分かる。

### (3) 『いさむさんのうち』の指導書、編纂・発行されず？

入門期国語教科書3冊の中でも特に資料が乏しいのが、第一読本『いさむさんのうち』であ

る。①本教科書は最後の編纂であり、②検定教科書（昭和24年度使用開始）と使用時期が重なったこと、さらには③「学習指導要領」の改訂（昭和26年度版）作業への従事とも関連があると思われる。とりわけ指導書については不明な部分が残っている。もともとこの教科書の指導書は、前2冊とは異なり、日本文でも発行されなかったものと思われる。今日、その原稿も見いだされていない。ただ表紙と目次の3ページのみ英訳<sup>9)</sup>が見いだされているところから判断すると、少なくとも翻訳の元となる原稿は存在していたものと思われる。ただ全てが完結していたかどうかは分からない。

### 3. 入門期国語教科書の発行、参考、示唆等

#### (1) 『まことさんはなこさん』・『いなかのいちにち』・

『いさむさんのうち』の編纂・発行、使用時期

こうして編纂された3冊の入門期国語教科書について、その原稿完了、印刷、発行のおよその日程は、会議報告等で見ると、それぞれ次のようであった。ここで、その実態を整理しておきたい。

##### ① 『まことさんはなこさん』

1948.9.27原稿完了、1949.2.11印刷許可、1949.5.18発行。  
指導書も発行。

##### ② 『いなかのいちにち』

1948.9.1原稿完了、1949.2.11印刷許可、1949.5.15発行。  
指導書（写真7）も発行。

##### ③ 『いさむさんのうち』

1949.1.27原稿完了、印刷許可日不明、1949.12.13発行。  
指導書は未発行？

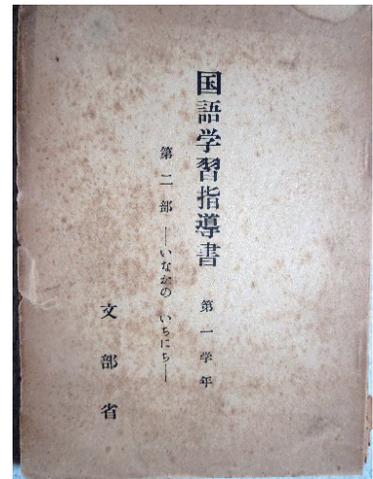


写真7 『いなかのいちにち』指導書

また、これらの教科書の使用時期については、以下の通りである。

1949（昭和24）年度－『まことさんはなこさん』、『こくご一』、『こくご二』

1950（昭和25）年度－『まことさんはなこさん』、『いなかのいちにち』、『いさむさんのうち』

検定教科書の発行と並行していたこと、検定教科書の採択の方が次第に増えていったことなどから、この3冊の入門期国語教科書は、実際の使用というよりはむしろ編纂方法のモデル、若しくはパイロット的性格が濃かったと言って良からう。

#### (2) CIE係官－ヘファナン、ヤイディ、ストリックランドー

『まことさんはなこさん』・『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』、これら3冊の入門期国語教科書に直接的に関与したアメリカ側の係官は、ヘファナン、ヤイディ（ヘファナンの後任として、1948年3月に着任）、ストリックランドの3人であり、いずれも女性の係官である。とりわけヤイディとストリックランドが、この入門期国語教科書の編纂過程に大きく携わっていたようである。この入門期国語教科書の編纂に関する重要会議が、1948.5.11～11.25、ほぼ毎週、定例（多くは金曜日）で開かれていた。<sup>10)</sup> とりわけヤイディとストリックランドは、文部省が提出する原稿に対して、「面白くない、長い、子どもの実態に合っていない、1年生の男女が健全な関係であるためには男女双方がリーダーであること」など、酷評を繰り返したようである。ここ

に、CIEと文部省との間で具体的な“攻防”の跡が見られる。

### (3) アメリカの国語教科書の影響

戦後初期のこの時期にアメリカの国語教科書の影響を受けたことは、この入門期国語教科書3冊の編修だけに止まらず、次のような点で、昭和20年代後期の検定教科書期における入門期国語教科書に大きな影響を与えた。

①1年生教科書が、第1分冊－プレプリマ、第2分冊－プリマ、第3分冊－第1読本という3分冊編修スタイルを確立した。

②二人の少年少女の生活物語、家庭生活、学校生活、地域生活という内容スタイルが定着した。

③挿絵の描き方が類似傾向を見せてきた。

### (4) ヘファナン文庫・IFEL文庫

入門期国語教科書の編集に直接関与したアメリカ側CIEの係官ヘファナンは、帰国に際し、入門期教科書を含め、関連書物を東京文理科大学に寄贈した。現在の筑波大学附属図書館に、ヘファナンがアメリカから取り寄せた文献が「ヘファナン文庫」として所蔵されている。この中に、入門期国語教科書の参考になったのではないと思われる数冊の教科書も存在している。

次のGATE HOBBER PEARDON SARISBURY “Tags and Twinkle” (1945年、写真8)、MABEL O’DONNELL “Open the door-The New Alice and Jerry Books- (READING FOUNDATION SERIES”、1947年、写真9)も、その一つである。男の子と女の子が登場する物語になっている。

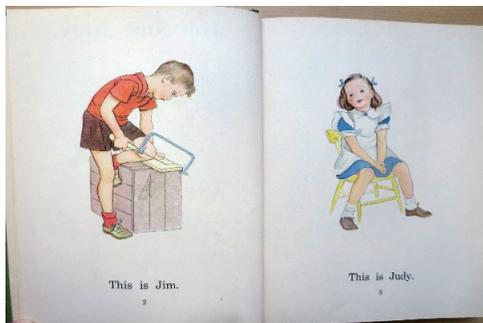


写真8 “Tags and Twinkle” 冒頭



写真9 “Alice and Jerry” 冒頭

### (5) 入門期国語教科書改訂の理論的バックボーン

また、この理論的なバックボーンになったのではないと思われるのがArther I Gatesの読みの理論である。筑波大学附属図書館のヘファナン文庫には、A・I・ゲーツの“The Improvement of Reading” (1947年、写真10) が所蔵されている。また、A・I・ゲーツが編纂した入門期国語教科書“This is Fun” (1945年、写真11) も所蔵されている。仮説の域を出ないが、こうしたアメリカの、当時としては最先端の読みの理論、さらには実務で得た実績を背景として、ヘファナン、ヤイディ、ストリックランドは、自信を持って、日本で入門期国語教科書の施策を展開していった

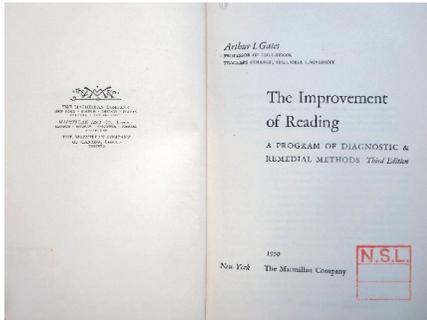


写真10 “The Improvement of Reading”

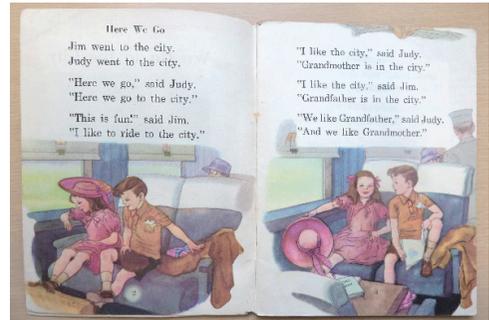


写真11 “This is Fun”

ものと思われる。

#### (6) 語句・語彙研究からの示唆

「日本の入門期国語教科書の第1ページには、なぜこんなに多くの文字があるのか」というのが、アメリカ側の最大の疑念であったようで、この観点からの指摘は多く見られる。Language Simplification－国語簡素化の視点から、ハルパン、ペルゼルを中心に多くの調査・実験等が報告されている。その結果、「入門期の読み」としては、「1～2語の繰り返し」を基本とし、内容は心理学的（児童の身近な経験）に、言葉は言語学的（言語の発達）に改善すること<sup>11)</sup>が示唆された。

#### (7) 検定教科書への影響

これら『まことさんはなこさん』・『いなかのいちにち』・『いさむさんのうち』3冊の入門期国語教科書の後世に与えた影響は計り知れない。この時期の検定の入門期国語教科書は、いずれも「金太郎飴」的現象をもたらしたからである。登場人物の男女児童二人（ひろし・はるこなど兄妹が多い）、短句、その繰り返し、家庭・学校における一日のできごと、挿絵の類似等、どの教科書が見まごうばかりである。写真12の教科書『こくご入門』（1949年、学校図書）<sup>12)</sup>、および写真13の教科書『太郎花子国語の本』巻1「おはよう」（1950年、日本書籍）<sup>13)</sup>もその一例である。なお後者の『太郎花子国語の本』は、女子が先に出ていて、他の教科書（多くは男子が先）よりもさらに斬新である。



写真12 こくご入門



写真13 『太郎花子国語の本 おはよう』

こうして編集・発行された『まことさんはなこさん』『いなかのいちにち』『いさむさんのうち』、これらの入門期国語教科書は、これに続く検定教科書の1年生用国語教科書のモデルとしての役割を果たし、大きな影響を与えていくことになったのである。その意味でも、これら3冊の入門期国語教科書は、国語教科書史上、画期的な国語教科書であったと言える。

#### 4. ま と め

こうして、わが国で進められてきた伝統的な言語教育観（「易から難へ」という論理性）だけでなく、子どもの学びという心理的な側面から入門期の国語学習を提案するという全く新しい発想がもたらされた。つまり、小学校一年生と思われる子どもの日常生活（家庭生活・学校生活）が経験的に、行動的に語られ、その経験的になじみのある活動を通して言葉学習（文字学習）を進めるというものである。従来の、学習は平易なものから次第に難解なものへ進めるという学習観ももちろん説得力のある考え方であったが、この学習者の経験優先、環境重視、心理的特性に基づいた学習観は新たに説得力を持つものであったであろう。その意味で、この受け容れは、言わば文字学習における革命であった。それまでのカタカナ先習からひらがな先習への移行も、児童の経験重視、環境優先という考え方に沿って、この時から始まった。その意味でも、この時のGHQ/CIEと文部省とのやり取りは、もっと注目されなくてはならない歴史的コマである。文字学習、ひいては国語教育のあり方を考究する点からも貴重なやり取りであった。歴史的意義とともに、今日的意義をも合わせ持つ画期的なできごとであったのである。

この結果、生み出されたのが、『まことさんはなこさん』、『いなかのいちにち』、『いさむさんのうち』であった。そして、この後の入門期国語教科書は、これにならって、「としお・よしこ」、「たろう・はなこ」、「ひろし・はるこ」、「よしお・はるこ」などの兄妹を登場させ、家庭・学校における一日のできごとを内容とし、言葉を繰り返し使い、音読・動作化を通して文字を習得させるという編纂方法を踏襲することになった。今日に及ぶ入門期国語教科書の編纂方法として、決定的な影響を与えることになったのである。

#### 5. お わ り に

戦後初期の入門期国語教科書のうち、第1冊目の『まことさんはなこさん』については、これまでも取り上げられてきたことがあった。が、第2冊目の『いなかのいちにち』、第3冊目の『いさむさんのうち』は、ほとんど取り上げられてこなかった。その意味で、本稿はその糸口を開くものとなったのではないかと思われる。これらに関する資料が少なかったり、使用の期間や使用の実態等が明確でなかったりして、これら3冊の教科書が教科書史上、大事な役割を果たしたであろうことは分かっている、なかなか取り上げることができなかった。本稿も、報告書を基盤にしたということもあって、表面的にしか捉えられていない部分もあり、考察に関してはまだ不十分である。GHQ/CIE文書の分析等、もっと詳細に行うことができればと考えている。

## 注

1. 戦後初期入門期国語教科書に関する先行研究として、筆者のものも含めて、以下のものがある。
  - ①小久保美子『CIEカンファレンス・レポートが語る改革の事実—戦後国語教育の原点—』（2002年8月、東洋館出版社）
  - ②坂口京子『戦後新教育における経験主義国語教育の研究』（2009年2月、風間書房）
  - ③吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究』（2001年3月、風間書房）
  - ④吉田裕久「戦後初期における入門期国語教科書の研究—「まことさんはなこさん」を中心に—」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部』第60号（2011年12月）
2. 篠原利逸は石森延男の部下で、『新しい国語教育の方向』（1949年6月、教育新報社）という編書がある。
3. 猪股辰弥は石森延男の部下で、『入門期の国語教育』（1949年4月、日本図書出版社）という著書がある。本書でも、『まことさんはなこさん』の扱い方について触れている。
4. 石森延男「占領下のころ」、『言語生活』164号（1965年5月、筑摩書房）
5. CIE文書、Box no.5633
6. この辺りの分析・考察については、拙稿1-④を参照。
7. 国語改革アドバイザーであるハルパンとの国語簡素化に関する会議も頻繁に開かれている。国語教科書の語彙提出とも関連していて、ハルパンは国語教科書の会議にもオブザーバーとしてたびたび出席している。
8. 石森延男「敗戦直後の国語教育」、『現代教育科学』99号（1966年2月、明治図書）
9. CIE文書、Box No.5630
10. CIE文書、Box No.5629
11. CIE文書、Box No.5455
12. 1948（昭和23）年に検定出願、1949（昭和24）年から使用されている。
13. 1949（昭和24）年に検定出願、1950（昭和25）年から使用されている。この『太郎花子国語の本』の詳細については、1-③の拙著を参照。

本研究は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（研究課題「戦後初期における入門期国語教科書の改革に関する実証的研究」、課題番号25381201、平成25～27年度）の報告書を基に増補・修正したものである。

[2018. 9. 27 受理]

コントリビューター：片上 宗二 教授（現代心理学科）

